

● 東アジア

体制と社会の隙間を観察する

国分良成（こくぶん・りょうせい）

慶應義塾大学法学部・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五三年、東京都
- ② 専門分野・地域……現代中国論・東アジア国際関係専攻
- ③ 学歴……慶應義塾大学法学部政治学科を卒業後、同大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程・博士課程を修了（法学博士）
- ④ 職歴……一九八一年慶應義塾大学法学部専任講師、八五年助教教授、九二年教授、九九〇七年同大学地域研究センター（〇三年東アジア研究所に改名）所長、〇七〇一年同大学法学部長兼大学院法学研究科委員長。その間、八二〇八四年米国ハーバード大学、ミシガン大学客員研究員、八七〇八八年中国・復旦大学客員研究員、九九〇九八年北京大学、台湾大学客員研究員（短期）。
- ⑤ 現地滞在経験……米国、中国、台湾に客員研究員として滞

在（職歴参照）。

- ⑥ 研究方法……政治学および国際政治学
- ⑦ 所属学会……アジア政経学会（〇五〇七年理事長）、日本国際政治学会（〇六〇八年理事長）
- ⑧ 研究上の画期……一九八七年から八八年までの復旦大学滞
在。表面の固い政治体制の内側でたくましく生きる人々の現実を垣間見た時。その時代、私の研究上の画期ともなる出来事、民主化運動〓天安門事件への雰囲気醸成されていた。
- ⑨ 推薦図書……国分良成・酒井啓子・遠藤貢編『地域から見た国際政治』（有斐閣、二〇〇九年）

メッセージ

高校時代私は卓球の選手で、大学に入る前年（一九七一年）に名古屋で開催された世界卓球選手権でピンポン外交が繰り広げられたことに感動したのを覚えている。大学（政治学科）では発展途上地域研究を志したいと考え、さまざまな講義を聴講し、石川忠雄先生の講義に最も感動してゼミに入った。当時の中国は文化大革命の末期、日本では全共闘時代末期だったが、文革賛美の熱気はまだまだかなりあり、石川先生はリベラルな立場から文革を権力闘争として批判的に論じていた。卒業論文は百家争鳴運動から反右派闘争への転換過程で、社会主義における自由の問題に関心を持っていた。その原点は映像で見た六八年プラハの春の衝撃にあった。

私は大学院から専任講師の時代、文革へいたる中国産党の権力構造の分析に専念した。八〇年代初頭中国留学を考えたが、その頃若手の研究者に機会は少なく、私の最初の留学先は米国となった。それが現在にいたる私の研究のスタイルと学術交流の人脈を決めることになった。留学一年目、ハーバードでは現在まで交流の続く多くの研究者と知己を得た。留学二年目、私は当時米国の現代中国研究の頂点ともいうべきミシガン大学のマイケル・オクセンバーク教授の門を叩いた。中国の官僚制に関心を移動させたのは、彼との研究交流の中からであった。

帰国後、ひとつのコンプレックスが私を襲った。中国経験のない英語使いの中途半端な中国研究者、という自身の姿がそれである。私は中国留学の機会を求め続け、八七年から八八年までの一年間、上海の復旦大学にようやく大学の教員交換留学の機会を得た。最初の何か月かは狂ったように中国語に集中し、習得するほどにコンプレックスが取れていった。社会に溶け込み過ぎて、A型肝炎にも感染してしまった。そのとき私はすでに三〇代半ばの助教教授であった。

地域研究者に現地語と英語、とくに会話は必須である。どちらかが足りなくても後ろめたさが残る。私は政治学者であり、中国でのフィールドワークは難しい。政治権力者や高級知識人との会合は多いが、視点と認識のバランスを図るために、私は一人で勝手に街に出て歩き回り、市井の人々と接し、会話を楽しむ瞬間を今でも続けている。政治体制と現実の隙間を観察するのである。

地域研究は楽しい。しかしそれに埋没してはいけない。何のために地域を研究するのか、学者としての使命、社会人としての使命、日本人としての使命、地球人としての使命、そして人間としての使命を忘れないようにしたい。